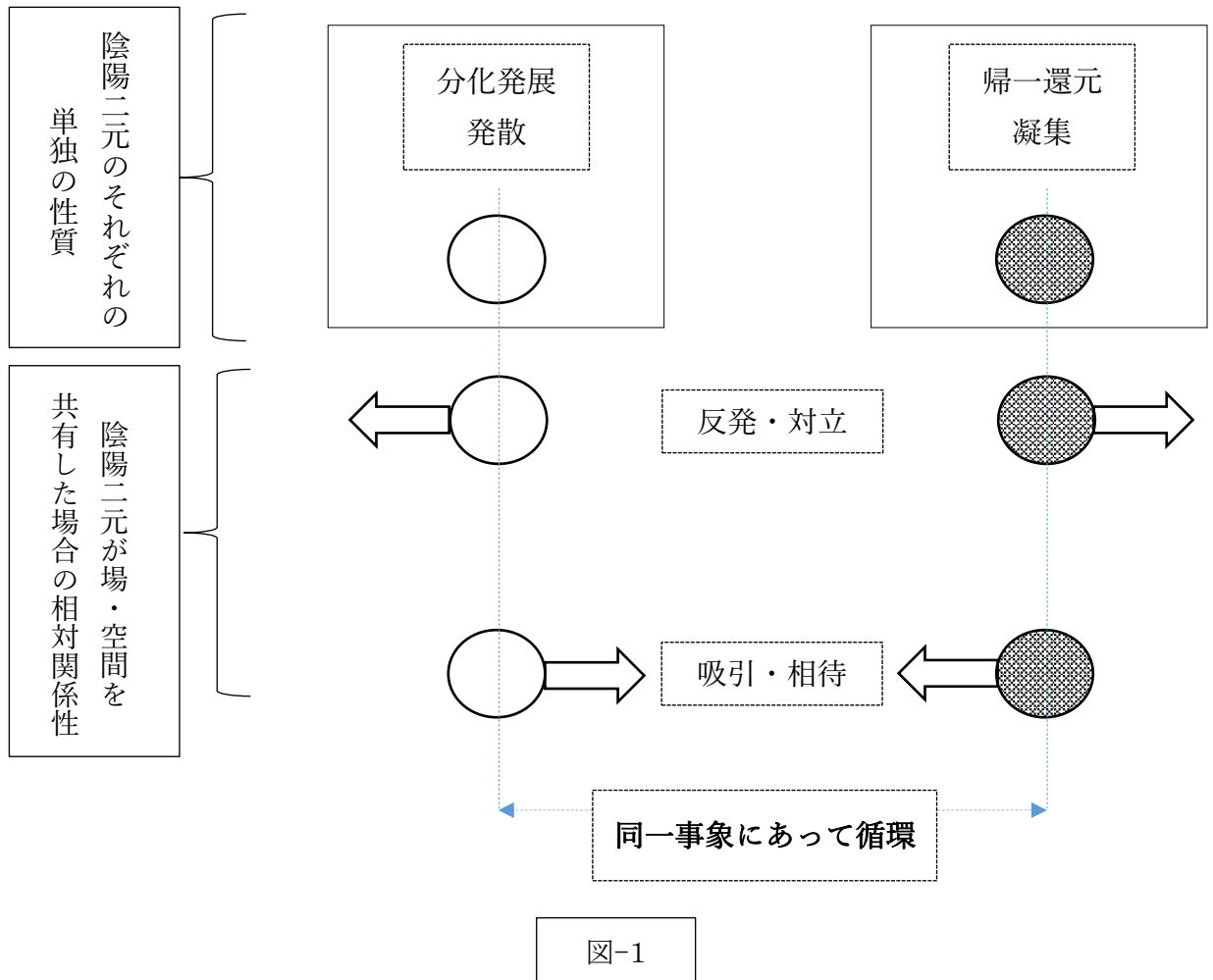


その 1 ；

「陰・陽二元相対（待）性原理」を端的にイメージ化すると。結局は、図-1 のとおりです。



その 2 ；

私は「陰陽五行説」を「陰陽五行動揺原理」と別称しています。その発展系を私の心に重ね、「クラゲ楕円の内陣構造化」とし——通称『クラゲだえん＝クラダェン模様』を図-2 のとおりに図式化しています。

- (※1) クラゲの基本的特徴は、体はゼラチン質で柔らかく、透明、浮遊生活をする刺胞（毒針）動物をいう。
- (※2) 楕円は、基準となる 2 定点（焦点、二つの対極）を持つ円をいう。焦点間の距離が近づいて一つになれば真円となります。
- (※3) クラゲの刺胞は図-2c 左右円内の眼（中心点・小さな核）に相当します。
- (※4) クラは^あ穴^な暗・穴^ぐ窖（陰・女）に、ダンは旦^な那・ダン^べベル（陽・男）に対応します。



図-2a

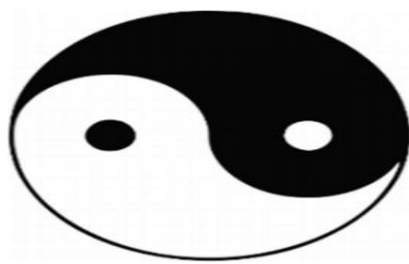


図-2b

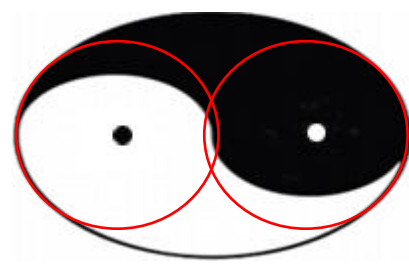


図-2c

その3；

もう一つの表し方は、図(表)－2のとおりです。

陰陽の二元要素を^(前)対極(対立)的に捉えるのか、^(後)一つのものの表裏と捉えるのかという命題があります。前者は一神教世界での考え方で、西洋的です。後者は多神教世界での考え方で、日本(東洋)的です。前者の対極的に捉えるというのは、二元要素を天秤棒の重りに重ねるイメージです。後者の表裏に捉えるというのは、二元要素の間・境界面に薄い透明膜を挟んでいるというイメージです。

図(表)－2		
陽		陰
善		悪
魂 (精神を司る性力)		魄 (肉体を司る性力)
和魂 (平和的な側面の温厚仁愛、沈着抑制等の妙用)		荒魂 (荒粗的な側面の積極戦闘、勇猛果断等の妙用)
神霊		鬼魔
仏性		魔性

その4；

ここで図－4のと通りの「メビウスの帯」――普通の帯を切断し、180度捻って接着したもの――を登場させます、带上のある点(部分)においては表面と裏面の区別があります。一面(表)のある点に指を置いて、帯の淵を越えることなく、進めて行くと元の(スタート点の)位置に戻ります。表裏の区別がなくなるのです。つまり、「表も無い裏も無い」「表＝裏、裏＝表」⇒「有るが無い、無いが有る」この矛盾するような相が現実化しているのです。現実化は矛盾ではなく、普通なのです。

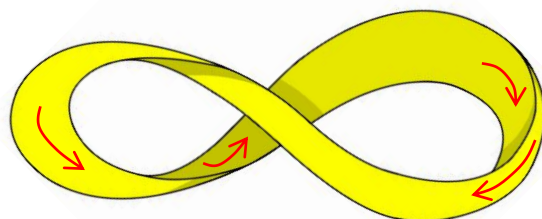


図-4

その5；

そこで、私^{わたし}心^{こころ}の蠢^{うごめ}きの実感は、前者でもなく後者でもない、前者でもあり後者でもある「陰陽対極同居^{どうご}」「仏魔同居」ですが、その図化構図は「クラダン模様」は「陰陽メビウス帯文様」なのであります。

・・

✓¹；仏魔同居の危うさ

陰陽が闘ぎ合うとは、陰 0～50：陽 0～50 の割合のことですが、時として、陰 49（51）：陽 51（49）になってバランスを崩した時です、「^{（前）}シンギュラーポイント または ^{（後）}ティッピングポイント」に達した時の暴走との関連です。

前者；一般的な手順では求まらない点をいう。水であれば沸騰点や氷結点のことをいう。徐々に徐々に加熱され、100 度に達した時点で水は煮えたぎり、水蒸気となる、こうなってしまうと、火を消しても、水を注ぎ足しても暫くは手の付けられない状態が続く。

後者；物事の分かれ目。特に、小さな変化が蓄積した結果、ある時点を境に劇的な変化を起こす現象についていう。分岐点あるいは転換点のこと。

まさにその特異点・分岐点に達し超えた時には、いわゆる「切れた」「弾けた」状態となり、殺傷という加害・危害事件を起こすに至るのです。

少なくとも、仏性 51 対魔性 49 に、仏性をわずかに強めておく必要があります。徳のある人を求めます。

✓²；結局の処

この世の森羅万象、万物および人間は、諸々の要素が絡み合って生じていますが、陰陽五行「日月木火土金水」の申し子であります。陰陽五行説とはいいますが、根本は宇宙における森羅万象を陰と陽の二元で捉える思想です、天象には太陽（日）と太陰（月）の二元があり、人象には男女両性がある。この陰陽ワンセットは互いに交感・交合して万物は生成化育、栄枯盛衰を繰り返すというのであります。宇宙の「宇」は四方上下の空間で、「宙」は古から今に至る時間である。宇宙も空間と時間の二元であり、空間も東西（左右）、南北（前後）、上下の二元、時間にも過去と未来の2元の相対で為っています。この相対の中には必然的に「中央」が意識され、空間にも中心があり、時間には今があります。このような説明は、「分別知^{へんべつち}」と裏腹の関係にあります。陰陽二元は、「分別知^{へんべつち}」を開いて行く「基点、トリガー、根源」ということです。

✓²；このような人間でありたい

以上のように陰陽二元相待原理を学んだと時に思うことは、次のような言葉で綴っております。

「否^ひ縫^{ぬい}自^{みづか}袋^{ふくろ}入^い自^{みづか}凛立^{りんたて}（ひほうじ、たいにゅうじ、りんりつ）」“自ら入る袋を自ら縫わずに、凛として立つ”ということです。

(end)